

# 「人生の寄り道」より

松谷武夫さん

<sup>(1)</sup>傘寿を迎え人生を振り返りながら、私の書いた本「人生の寄り道」の中から、神戸空襲を綴ったページを辿りたいと思います。

## 神戸空襲

昭和20年になりますと、戦局はさらに悪化、敗色が濃くなってきました。硫黄島の全滅の後、アメリカ爆撃機B29が日本本土へ空襲を激しくしてきました。初めは軍需工場のある工業地帯へ、3月に入って東京・大阪・神戸へと大都会の住宅地に、無差別の空襲を加え、各都市へと広がって行きました。

私は忘れもしない3月17日、深夜突然に警戒警報が鳴り、間もなく続いて空襲警報が発令となりました。神戸の街に敵機B29の襲来です。B29に向け山側と浜側双方からサーチライトを照らし高射砲で、上空では日本の戦闘機も応戦です。敵機は照明弾を手がかりに爆弾や焼夷弾を、雨あられの如く投下しながら通り過ぎて行きます。

両親や兄弟3人の家族は、我が家に隣接する大きな防空壕の中へ避難しました。

やがて近くの住宅に火の手が上り、消火活動をしても次々と至る所から住宅が燃え、そして周囲全体が火の海となって行きました。この様子を見て危険を感じた父は、このまま防空壕にいると窒息死や焼死の危険があると判断して、学校に避難することになりま

### 【神戸空襲】

3月17日未明の大空襲により、兵庫区、林田区、葺合区を中心とする神戸市の西半分が壊滅、5月11日の空襲では、東灘区にあった航空機工場が目標とされ、爆弾による精密爆撃が行われました。この空襲では、灘区・東灘区が被害を受け、そして6月5日の空襲では、西は垂水区から東は西宮までの広範囲に爆撃され、それまでの空襲で残っていた神戸市の東半分が焦土と化しました。

こうして、この3回の大空襲によってほぼ神戸市域は壊滅し、空襲による現在の神戸市域の被害は、戦災家屋数14万1,983戸、総戦災者数は、罹災者53万858人、死者7,491人、負傷者1万7,014人という大きな惨禍でした。

した。

防空壕<sup>ごう</sup>を出て近くの学校に避難するとしても、これまた大変な命がけです。この時すでに周囲の家は燃え盛る火の海です。凄まじい熱風が吹き火の粉が舞い散る、その中を潜り抜けながら学校に向いました。頭にかぶっている<sup>(9)</sup>防空頭巾や衣服に飛んで来る火の粉を払いながら、燃える我が家の前を通り親子一緒に、やっとの思いで学校に避難しました。

避難した校舎で、両親は警戒したり兄弟は職員室に身を潜めていました。学校の建物は上から見てコの字型の鉄骨3階で木造2階建の別棟と廊下で接続し、その廊下はシャッターで閉ざされています。この当時は各教室の廊下に、大きな樽<sup>たる</sup>を置き水も入れバケツも用意していました。そのシャッターの所から燃えさかる木造校舎の火が、鉄骨校舎の廊下に入り込むと一大事です。1階2階共大人は水を掛けて警戒したようです。

そのうち、木造校舎は燃えつき崩れてしまいました。戦時中でストーブは使用しなくても、壁に煙突の穴があり、そこから火の粉が舞い込んでカーテンを焦がす様です。別の所ではコンクリート壁面の外側で熱い炎が渦巻いたのか、その内側の木の床は一部が焦げていました。直接火が入らなくとも発火の恐れもあり、安心は出来ませんでした。

暗闇を赤く焦がし、長く燃え続けた大きな炎も収まりかけました。長く感じた深夜の悲劇は悪夢のようでした。やがて次第と東の空が明るくなり始めました。そしていつもの朝日が差し込んで来ます。周囲の街は驚くほど一変していました。これまでの多くの家が一晩で焼失してしまい、哀れ残酷なまで<sup>(10)</sup>変貌した焼野原でした。避難出来た学校が運よくポツンと残りました。山側は時々遊びに行った会<sup>(11)</sup>下山が見え、浜側はこれまで見えなかった山陽本線の高架が見えます。<sup>(12)</sup>荒涼とした焼野原を、ぼんやりと見詰めていました。

10歳の少年の心に、全く想像を絶する恐ろしい<sup>(13)</sup>生き地獄を見た様な悲惨な光景は、今なお脳裏に焼き付いています。両親は苦難の中この先どう生活して行けるのか、<sup>(14)</sup>茫然<sup>ぼうぜん</sup>自失<sup>じしつ</sup>です。幸い中道国民学校のおかげで家族の生命が助かったのが救いでしょうか。

焼野原の我が家の跡は、全てが灰になり残された物はありません。ただ<sup>(15)</sup>供出用に集めていたアルミ貨幣は溶けた固まりになり、又ご飯を炊く釜の中は、お米が炭の様な焦げた固まりになっていました。

空襲の時、近所で死亡された人がいました。遠く離れた火葬場へと移送されました。犠牲者も多く処理しきれません。混乱の非常時だけに葬儀も出来ず、家族で処理して下さいとのことでした。仕方なく離れた所で茶毘<sup>(16)</sup>に付し、誠に哀しいお気の毒なことがありました。

こうして中道国民学校で1週間ほどローソクの灯りで寝泊まりしました。にぎり飯や缶詰など、伊丹から送られた様です。簡単な診察もありました。空襲の煙の影響か、私は目の痛みと頭も少し痛く、ぼんやりしていました。又入浴は出来ず、肌着は無く着替えも出来ませんでした。

戦時中のことで戦災者への支援は余り無く、途方に暮れる日々でした。その為神戸を離れて、母の故郷倉敷へ行く事になりました。

終戦そして戦後の10年、両親は大変ご苦労をされました。私も長く苦難の少年時代・青年時代を過ごしました。あの当時を思い、過ぎ去りし日の記憶が甦<sup>よみがえ</sup>って来ます。

- 
- 1 傘寿...「傘」の略字の「伞」が「八十」と読めることから数え年の80歳。
  - 2 軍需工場...軍隊が必要とする武器類などを製造する工場。
  - 3 襲来...激しい勢いでおそいかかってくること。
  - 4 双方...両方。
  - 5 サーチライト...ランプに反射鏡やレンズを組み合わせて、ある限られた範囲をほぼ平行な光ビームで照らす装置。
  - 6 高射砲...飛行機を射撃するのに用いる中小口径砲。発射速度が速く射界が広い。もと陸軍での呼称で、海軍では高角砲といった。
  - 7 照明弾...夜間の戦闘で照明や信号に用いる弾丸。
  - 8 焼夷弾...焼夷剤と少量の炸薬<sup>さくやく</sup>とを入れた砲弾または爆弾。油脂焼夷弾、エレクトロン焼夷弾、黄燐焼夷弾など。
  - 9 防空頭巾...太平洋戦争末期の日本で使われた、空襲の際に落下物から首筋や顔を守る頭巾。
  - 10 変貌...姿や様子などがすっかり変わること。
  - 11 会下山...兵庫県神戸市兵庫区会下山町にあり、長田区との区界隣接する標高80～85mの山。

- 12 荒涼...荒れ果ててものさびしいこと。
- 13 生き地獄...生きながら地獄にあるようなひどい苦しみにあうこと。また、そのありさま。
- 14 茫然自失...あっけにとられたり、あきれはてたりして我を忘れてしまうこと。
- 15 供出...政府などの要請に応じて食糧や物資などを差し出すこと。
- 16 荼毘に付す...亡くなった人を火葬すること。

# 東京空襲

大山陽子さん

今年は終戦から70年になります。戦争のこわさを思い出しつつ戦災にあった時のことを書いてみようと思いました。私は昭和6年11月東京の神田(昔は神田区でしたが今は千代田区です)に生まれました。昭和16年12月8日に大東亜戦争が始まったことをラジオから知らされました。母が町内からの知らせで、バケツに水をいっぱい入れて次々と渡して火災を消す訓練をしたりしていました。昭和18年、父が神田の家の玄関の隣りのところにありました二畳の部屋の畳をあげて、下の土を深く掘って小さな階段をはめまして防空壕ごうを作りました。昭和19年、母は妹2人(小1と2才)を連れて長野県松代に疎開(2)致しました。父は甥おいと一緒に小さなトラックで、自分の生れた家の近くで借りていた15畳の部屋に、私達の生れた町から写真や小さな家具を何回か運んでいました。

昭和20年2月25日の朝、雪が降っていたようでしたが、6時頃に空襲の音と共に祖母と父に起こされ防空頭巾をかぶり、

祖母と防空壕ごうにもぐりました。その前から敵の飛行機のB29の音のすごさと同時に、お向いの玄関のガラスの一枚戸がガラガラガラビシャとこわれた音がしました。その時、何回も爆弾の落ちる音、爆風の音や爆破の音と、ただただこわさでいっぱいでした。その上、家が時々くずれる様子があり、父が少し表に出ますと、少し先で燃えるのが見えました。それで、この防空壕ごうでも危ないから逃げようということになりました。お隣さんにリヤカーがありまして、2軒で一緒に逃げるということになりました。ふとんとまくらを

## 【東京空襲】

東京は昭和19年11月14日以降に106回もの空襲を受けました。特に昭和20年3月10日、4月13日、4月15日、5月24日未明、5月25日-26日の5回は大規模でした。

その中でも、死者数が著しく多い昭和20年3月10日の空襲(下町空襲)は「東京大空襲」と呼ばれ、この空襲だけでも罹災者は100万人を超えました。

当時の警視庁の調査での、3月10日の被害数は以下の通りです

死亡：8万3793人  
負傷者：4万918人  
被災者：100万8005人  
被災家屋：26万8358戸

のせ今思うと、御飯の入っていたお鉢もあったようでした。その時、雪と火花が頭の上をとんでいましたが、爆弾の音も聞こえました。とにかく三軒家を通りすぎて四ツ角に来て火事のようなようでしたが、無理矢理に中をくぐって行きました。今考えますとどの位かわかりませんが、祖母、父、私とお隣さん2人で神田駅を越して今の淡路町（神保町の本屋さんあたりより手前）の淡路公園に来ましたが、人、人でいっぱいでした。でも神田駅の私の住んでいたところと反対の方は、爆撃していませんでした。夕方空襲警報が解除になりまして、父が家を見てくると出て行きました。割合に早く帰りまして「10軒位先まで燃えているが家が大丈夫なようにすっかり鍵をかけてきた」と言って、私の教科書と逃げた時にも持って来ましたが、別の御飯の入っているお鉢を持って来ました。そのうちうす暗くなりました時、私達の名前を言っている声が聞こえました。淡路町で高級家具の店をしていた遠い親戚が迎えに来てくれたので3人で行きました。そして家に着き夜になりフカフカのおフトンに寝かして下さり、お家の方は座ぶとんにお休みしていらっしやいました。その時の有難さは今でも忘れられません。昨年思い切って淡路町まで行って見ましたが、あれからすっかり建物が変り、ビルばかりでわかりませんでした。翌々日、父は会社の宿直室、祖母と私は祖母の姉が世田谷にありましてお世話になりました。そこで3月9日の浅草の大空襲で真赤な空が見えました。翌日、祖母と2人で母のおります松代に参りました。松代では30分友達と歩いて行きますが2回ほど警報がある位で橋の下にかくれました。皆さんラジオが無く、近くの温泉で8月15日のラジオを聞きましたがよくわかりませんで、アメリカの人が来るかもとか、外に出てはいけないとか言われました。今考えてみますと、神田で空襲の前食べるものが無く、御飯といいましてもキビでした。うどん粉ではなくワラのような物とか、おいものくきとか、時折り父が母の着物を持ち私を連れて農家まで行って、おいもと替えてもらったことを思い出します。たまにラジオで「何班すけそうだら」という声ばかり聞こえていました。私たちは松代で御飯をいただきましたが、東京におりました父は毎日食事に苦労したそうです。今思いますと、肉もほとんど食べなかった私など、今でもとても

健康です。今の若い方の食事は和食が少ないように考えられます。

私は終戦の翌年昭和21年4月から東京の元の女学校(昔は6年生から入学しますが女学校でした)に戻りました。淡路町の親戚から学校に行ってましたが、弁当を持って来られない方もいて、土日月火と休みで私も月1回は松代に帰りました。汽車が混んで何回連結にぶらさがったかわからず、トンネルになりますと奥の方からだんだんとおされました。帰りは何回も荷物検査があり、教科書も放り出されましたことを思い出しました。

戦争はいやです。平和な日本であることを祈っております。

- 
- 1 大東亜戦争...太平洋戦争をいう当時の日本側での呼称。
  - 2 疎開...空襲の被害を避けるために、一箇所に集中する施設や人員などを分散させること。

# 岡山空襲

斎藤典子さん

こちらの作文は、斎藤さんの御家族が小学4年生の時に経験した岡山空襲について、小学5年生の時に作文したものです。

昭和20年6月29日午前2時40分。B29, 70機を持って岡山市を爆撃しました。ぼくが寝ていると、お母さんが「まあちゃん、まあちゃん」といわれたので、目がさめました。「おちついて服を着なさい、空しゅうですよ。」とお母さんがおっしゃいました。ぼくはかやから出て、服を着て、防空の用意をしました。すると、ざざざざーどどどどどどんと、すさまじい音がして電気が消えました。お母さんは黒い紙のまくを二重におはりになり、ローソクに火をおつけになり、まどガラスを全部お開けになりました。ぼくはリュックサックをおいしました。お母さんもおわれました。ぼくはくつをはき、お母さんと2人で外へ出ました。7, 8人川のへりにいました。ぼくらは橋を渡って行

## 【岡山空襲】

昭和20年6月29日、岡山市街地はアメリカ軍による大規模な空襲を受けました。

ティニアン島を飛び立ったB29の最初の1機が岡山市上空にあらわれたのが午前2時43分。それから午前4時7分までの1時間24分にわたって、138機のB29により約883トンの焼夷弾が投下されました。

この空襲で当時の市街地の約63%が焦土と化し、少なくとも1,737人以上の犠牲者が出ました。

犠牲者については2,000人を超えるという説もあります。

きました。橋には焼夷弾しょういだんのひらけたのがもえていました。お母さんが「おそれずふみこえて行きなさい。」とおっしゃいました。初めはこわかったが、お母さんと2人で火の中をむちゅうで走りました。ほうらい橋のこちらにトラックが止めてありました。ほうらい橋を過ぎて一女のへん(1)を通った時、ほうらい橋へ焼夷弾しょういだんが落ちました。僕らの近くにも落ちました。ふとんをかぶりながらぼくはけい馬場の方へ行きました。途中ぼくらに「私もつれにして下さい。」と、よそのおばさんがおっしゃったのでつれにしてあげ



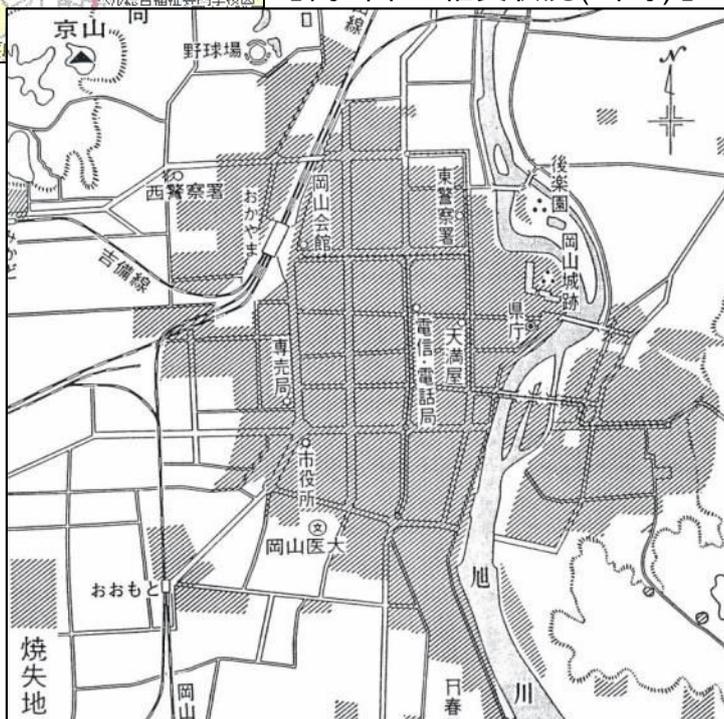
おにぎりをたくさんこしらえて、岡山まで持って行かれました。

- 1 一女...岡山県第一岡山高等女学校（現岡山県立操山高等学校）。
- 2 弘西...岡山市立弘西国民学校（現在廃校）。
- 3 藤原,たい師,財田...旧西大寺鉄道の駅名
- 4 たわ...峠。山の尾根の低くくぼんだ所。
- 5 笹岡...現在の「岡山県岡山市東区瀬戸町笹岡」。
- 6 しゅくおく...現在の「岡山県岡山市東区瀬戸町宿奥」。

### 【現在の岡山市街地】



### 【岡山市の罹災状況(当時)】



# 戦争体験

大坪和子さん

昭和19年3月10日、呉の上空にどこからともなく敵の飛行機が低空で親子焼夷弾<sup>(1)</sup>を投下。敵機は編隊を増やし、次から次へと爆弾を投下して行きます。夜ともなれば灯火管制になり、外へ灯りが漏れないように豆球を黒い布で囲み、「救急袋」<sup>(2)</sup>と水筒を肩にかけ、一日中肩から離すことが出来ません。救急袋の中には、焼米<sup>(3)</sup>が一握りと乾パン<sup>(4)</sup>が入っているだけです。当時、私は小学6年生で母にまわりつくだけの子供です。空襲警報が発令になると爆音と共に爆弾が「ヒューン」「バリバリ」「ドン」と落とされ、逃げるのが一生懸命です。怖い恐ろしい毎日でした。昭和20年7月2日未明、敵機B29、80機の編隊により呉は大空襲を受けました。火の手は盛んになり、みるみる火の海となって、火の中を逃げる人、逃げ場を失い逃げまどう人、助けを求める人たちが

## 【呉空襲】

呉地区の空襲は、市街地が炎上した45年7月1～2日を中心に同年3月19日から同7月28日まで計14回あり、呉市史や県警察史などによると犠牲者は軍関係を除いて約2千人とされています。

7月1～2日の空襲では、152機のB29から、16万454発もの焼夷弾を、すりばち状の呉市街地の周辺から中心部へと投下しました。市民は逃げ道を封じられ、防空壕に逃げ込んだ人たちも、猛烈な火災や吹き込む煙にまかれて蒸し焼き状態になり、無残な死をとげました。

この空襲による犠牲者は2,000人以上とも言われ、約337ヘクタールが焼失し、12万5千もの人々が家を失いました。

けて機銃掃射で撃ってきます。人の頭が飛び、手が飛び、「痛い」という声は呻き声<sup>うめ</sup>しか出ない姿で息を引き取る人や、お母ちゃんと泣き叫びうずくまる子供目がけて機銃掃射で撃ってきます。「アッ」、「ウッ」と叫ぶ声が遠く聞こえるだけです。生き地獄の中、悲惨と苦しむ姿はただむごいとしか言いようがありません。悔しいです、情けないです。敵は昼も夜となく撃ってきます。修羅場<sup>(5)</sup>となる中、7月8日には住み慣れた我が家が丸焼になりました。戦火は激しさに激しさを増していきます。敵機が去り、警戒警報が発令になると「小瀬音八」さんと言うお父さんが、娘さんの着物を思い出したように取りに帰り、柳行李<sup>(6)</sup>を抱え防空壕の入口まで来た時、どこから飛んできたのか敵の機

銃掃射を受け、息を引き取りました。娘さんの着物の端布<sup>(7)</sup>が左手に引っ付いたままの姿で死んでいった悲しい思い出は、くやしくて子供心に忘れることが出来ません。防空壕<sup>ごう</sup>生活は想像以上のもので、布団も無い土の上にムシ口を敷き、食べる物は乾パンを食べながら飢えをしのぎました。雨が降ればみんな雨で身体を拭いていますが、大変なもので死体の匂いがプンプン臭ってきます。きな臭い焼け跡の臭いととも、涙を流す人たちがただ一人として嫌な顔をする人もなく、お愛想に「無残やなあ。」と言いながら、死体に手を合<sup>あ</sup>わし冥福を祈るだけです。着の身着のまま、私の頭には「シラミ」<sup>(8)</sup>がわきましたが、痒い<sup>かゆ</sup>と思ったことはありません。1ヶ月以上の防空壕<sup>ごう</sup>生活も警戒警報が解除になり、姉と私は我が家に帰り軍港を見た時、病院船<sup>(9)</sup>が艦砲攻撃<sup>(10)</sup>を受け、船体が横に傾きながら沈んでいきます。白衣を着て片足の無い兵隊さんや両足の無い兵隊さんが逃げ場を求めているのが見え、その中に頭全体に包帯を巻いた兵隊さんが大声で叫びながら海の中へ身を投げました。再び空襲警報が発令になり、母は私たちにバケツで水を掛け、母も水をもう一杯かぶり私たちを引きずるように防空壕<sup>ごう</sup>へと入ると、後も振り向かず一目散に帰って行く。母の後を追う「お母ちゃん」、「お母ちゃん」と泣く私の手を姉が力一杯ひっぱり、2人で泣き抱き合いました。今思うと、あの時の母の気持ちが痛いほどわかります。昭和20年8月15日、天皇陛下自らラジオを通して戦争が終わった放送を聞き、子供心に流れる涙が止まりませんでした。私たち家族は無事再会できましたが、母は私たちを諭すように強い口調で「戦争の犠牲者になり悲しんでいる友の事を決して忘れてはいけません。人の心の痛みの解る人間になるのよ。」と言いながら、私たち2人をきつくきつく抱きしめ、いつまでもいつまでも離れようともせず、姉と私の首筋に熱い母の涙が一すじ二すじと伝わってくるのが解りました。母と子、子と母の強い絆<sup>きずな</sup>の涙でした。二度と味わいたくない戦争の苦しみは、生涯消えることのできない1ページとして、私の中で深く深く閉ざしております。昭和60年1月7日、母は81歳で眠る如く<sup>(11)</sup>霊山へと旅立ちました。私は母の遺影<sup>(12)</sup>を抱いて50年ぶりに呉の地を踏みました。涙はとめどなく流れましたが、昔の面影は跡形もなく、静かな海の上を小舟

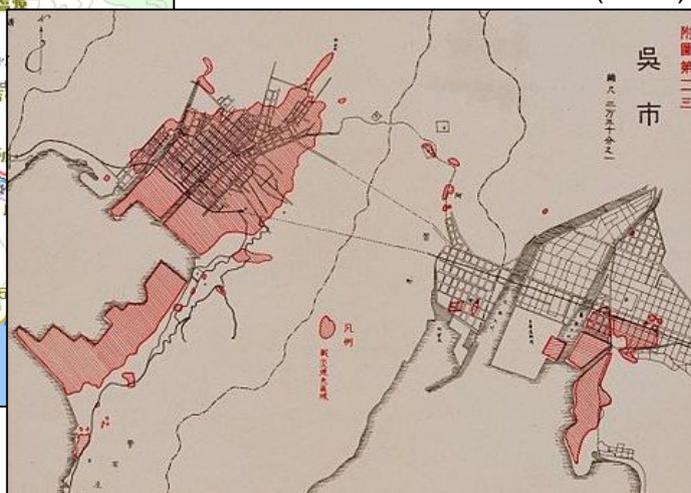
が行きかう平和な街並みへと変わっていました。あの戦火の中で傷を受けた夾竹桃は大きく成長して、私を快く迎えてくれました。暑い夏の日に美しいピンクの花を咲かし、私の心を和ませてくれる大好きな花です。今こうして私が幸福な生活が送れる事も、こうして苦しい中で最大に人生を生き抜いた賜物と、感激でいっぱいです。平和の心を祈りながら、幸せへの道を歩み続けてまいります。

- 1 親子焼夷弾...親弾の投下後、時限装置により空中で分解し、中の子弾が広範囲に拡散するしくみの焼夷弾。
- 2 灯火管制...夜間、空襲に備え、灯火を消したり覆ったりして光がもれないようにすること。
- 3 焼米...備蓄用の食料。もみをいって殻を除いたもので、水や湯をかけ、あるいはそのまま食べた。
- 4 乾パン...保存・携帯に便利のように固く焼いたビスケット状の小形のパン。
- 5 修羅場...戦乱や闘争で悲惨をきわめている場所。
- 6 柳行李...小林市雄さんの体験記にある注釈のとおり
- 7 端布...はぎれ。半端な布切れ。
- 8 シラミ...シラミ目の昆虫の総称。吸う口を持ち、人間や家畜の血を吸う害虫。
- 9 病院船...戦時に傷病者や海難者らを収容し、加療しながら輸送する船。
- 10 艦砲攻撃...軍艦から陸上への砲撃。
- 11 霊山へ旅立つ...亡くなること。
- 12 遺影...亡くなった人の写真。
- 13 夾竹桃...インド原産の樹木。夏に紅色の花をつける。

### 【現在の地図（呉市付近）】



### 【呉市の罹災状況(当時)】



# 18歳の夏

和多孝行さん

昭和20年5月，第一期海軍特別幹部練習生として大竹海兵団に入団。基礎課程が終る7月<sup>(1)</sup>ジフテリアに感染し岩国海軍病院で<sup>(2)</sup>加療中，奇しくも8月6日，広島に投下された新型爆弾（原子爆弾）<sup>(3)</sup>炸裂直後の模様を<sup>(4)</sup>望見した。

広島と病院（山口県藤生町）とは直線距離で約40キロ，敵島が左手に見える外は海上に遮るものはなく，視界は抜群。

その日は朝から快晴。海岸近くの丘に建つ伝染病々棟2階の大部屋で，15名の病兵が安静時間をベッドですごしていた。

突然，「ドドーン」と<sup>(5)</sup>はら<sup>(6)</sup>肚に<sup>(7)</sup>応える轟音。轟音。「何だ！ 空襲か！」室長が窓へ走る。先任は階下の事務室に飛んだ。先日，屋上の赤十字マークを無視した米艦載機の機銃掃射を受けたばかり。病兵ながら<sup>(8)</sup>敏捷であった。

外を見ると，広島の上空に積乱雲のような大きな煙が，立ち昇っていた。

「<sup>(9)</sup>弾薬庫か。手荒くやったもんだ！」

<sup>(10)</sup>パラオ警備隊還りの水兵長が<sup>(11)</sup>つぶやく。灰黒色の煙は生き物のように横に拡がっていく。

不気味に成長し形を変え，キノコのようになってきた。広島<sup>(12)</sup>の街がスッポリと傘の下，という状況。余りの変化に言葉が出ない。

しばらく経ってみると，雲は更に拡がり<sup>(13)</sup>近郊まで達して垂れ下がり，<sup>(14)</sup>霞んでいた。どうやら夕立らしい。

午後になって情報が流れ，弾薬庫などの爆発ではなく，米爆撃機B29が投下した新型爆弾の<sup>(15)</sup>炸裂で被害甚大，市街が<sup>(16)</sup>壊滅したという。

家屋，施設は<sup>(17)</sup>倒壊，死者・負傷者続出だが詳細は不明。医療機関の機能不能。他市町村隣県から応援が入っているとのこと。当院にも出勤命令が下ったという。<sup>(18)</sup>道理で昼の検温時に，明るく元気者の<sup>(19)</sup>K当直看護婦が，姿を見せなかったはずである。

それにしても何と恐ろしい爆弾だろうか。ただの1発ですさまじい破壊力。驚くばかり。

更に3日後、長崎にも投下。この調子が続けば日本が完全に<sup>(17)</sup> 廃墟<sup>はいきょ</sup>となる日は遠くはない。

「日本もいよいよ<sup>(18)</sup> 最期か」ふとそんな想いが<sup>かす</sup>掠めるのだった。数日後、被爆の実状を目のあたりにすることになる。

念願の退院が12日の午後に決まった。部屋の出入口にも近いベッドともサヨナラ！

当日の昼食後、病棟看護婦長、室長に挨拶をすませ、病院本部に向う。そこで配置先・呉警備隊入隊の指示を受けた。

藤生駅の時計は時刻表を過ぎていたが、改札口には乗客の列。輸送は<sup>(19)</sup> 軍需優先、それに警報発令が重なりダイヤの乱れは<sup>(20)</sup> 日常茶飯時。

やがて広島行が到着、超満員である。だが乗らなくてはならない。強引に割り込みステップに立ち、握り手金具に腕を通す。背負った<sup>(21)</sup> 衣囊が人に迷惑するが、許しを願う他はない。この場所は涼しく視界満点。しかし<sup>(22)</sup> 粗悪<sup>た</sup>な石炭を<sup>た</sup>焚くSLの吐く不燃の粒が、顔を直撃する。まさに光と影であった。

懐かしい大竹駅を出ると<sup>はつか</sup> 廿日市駅。太田川の鉄橋も近い。ここを渡り切ってから沿線の庭木がおかしい。変色した葉、黒ずんだ幹と普通ではなかった。列車が徐行なみの速度だからよく見え、分かり易い。

列車が進むにつれて変貌してきた。木の葉が茶褐～赤褐色、幹が焦げて黒い。アカマツの大木が南面する葉は赤褐色、幹が炭化して居り、木を縦に自然色と2色塗りしたようで、とても天然木とは思えない。

石の鳥居、<sup>とうろう</sup> 灯籠が倒れて散乱し、角がとれて変形していた。石垣が黒ずみ、割れ、中にはタマネギを剥いたような割れ方もあった。

よほどの高熱に<sup>さら</sup> 曝されたに違いない。家屋の破損、倒壊が増え満足なものはない。広島駅に入構。目に飛び込んだのは屋根のない駅舎、プラットホーム。プラットの屋根を

支える鉄骨が<sup>あめ</sup>飴のように曲がって線路に垂れ、コンクリート床の中央が大人の拳が入る程に割れて傾き、端まで続く。駅舎の壁に上から下へイナズマ型の裂け目があり、<sup>あわ</sup>憐れな姿で真夏の太陽を浴びていた。呉線発車まで街を見ようと地下道に降りる。

そこには担架がズラリ。担架の上には顔中に白い塗り薬、顔や手足を包帯巻き、とさまざまな姿で横たわっている。傍らに<sup>すわ</sup>坐り、立膝に顔をうめる女性もいた。臨時収容か、移送中なのか。被爆後1週間が経とうというのに。玄関に出る。街がない。見渡す限り<sup>( 23 )</sup>がれき瓦礫。

<sup>( 24 )</sup>軍都・広島<sup>( 25 )</sup>の面影は一片も留めず、荒涼とした光景の中、傾くビル、半壊の<sup>( 26 )</sup>土蔵、黒焦げの大木が点々とするのみ。その中を、海風が<sup>おう</sup>嘔吐を催させる<sup>( 27 )</sup>異臭を運んでくる。想像以上の光景に立ち<sup>すく</sup>竦み言葉もない。

やる瀬なく目を落すと、裂けた水道管が水を噴き、小さな虹を作っていた。地獄絵の中に虹…。思わず近寄り、時を忘れて眺めていた。

あれから70年。世に「<sup>( 28 )</sup>美しき10代」というが、わが10代 - 18歳の夏は<sup>ちまた</sup>巷の言とは縁遠く、二度と望まない夏でした。

- .....
- 1 ジフテリア...ジフテリア菌の感染によって起こる、主として呼吸器の粘膜がおかされる感染症。
  - 2 加療...気やケガの治療をすること。
  - 3 炸裂...砲弾などが激しく爆発すること。
  - 4 望見...遠くからながめること。
  - 5 前任...先にその任務・地位に就いていること。また、その人。
  - 6 階下...下の階。
  - 7 敏捷...動作がすばやいこと。
  - 8 弾薬庫...弾丸や火薬を貯蔵する倉庫。
  - 9 パラオ警備隊...パラオ諸島の防衛に参加した部隊。
  - 10 水兵長...旧海軍における水兵科の兵の最上位の階級。
  - 11 近郊...都市や町に近い場所。町はずれ。
  - 12 甚大...物事の程度が非常に大きいさま。はなはだしいこと。
  - 13 壊滅...すっかりこわれてなくなること。
  - 14 倒壊...建物などが倒れてこわれること。
  - 15 道理で...そうである原因・理由がわかって納得するさま。

- 16 当直...日直や宿直にあたること。また、その人。
- 17 廃墟...建物や街などの荒れ果てたあと。
- 18 最期...死にぎわ。
- 19 軍需...軍事上必要とされること。また、その物資。
- 20 日常茶飯事...毎日のありふれたことから。
- 21 衣囊...海軍下士官兵が衣類を整理して入れておくキャンパス製の布袋。
- 22 粗悪...粗末で質が悪いこと。
- 23 瓦礫...破壊された建造物の破片など。
- 24 軍都...軍の施設の多い都市。
- 25 一片...ひときれ。ひとかけら。
- 26 土蔵...外壁を土や漆喰(しっくい)などで塗り固めた倉庫。
- 27 異臭...変なにおい。いやなにおい。
- 28 巷...世間。世の中。